

## 6. 采女城ゆかりの地名・史跡

### 矢矧橋

「矢(や)を矧(は)ぐ」とは矢竹に羽をつけて矢を作ることを言う。矢矧橋ができたのは昭和30年のことである。

城のある字北山に隣接する字森ヶ山には矢矧の地名がある。近くに矢竹が生え、戦の矢を作ったことに由来するといわれている。橋の近くには昭和9年に建立した「森ヶ山道路修築記念碑」が建っている。森ヶ山からの通学路であることからこの名をつけたものと推察される。



### 古市場

采女城跡南、内部川南岸に采女町の小字名として残る。ここより南小松を経て神戸に向かう道があり、市が立ったことであろう。旧道沿いには薬師堂や常夜灯が建っている。古市場の成立は采女城の築城より古いが采女城に結び付けられることが多い。



この地には延久二年(1060)真徴が開基した真観寺があり、大日如来を本尊としたが、たびたびの内部川の氾濫にあったために杖衝坂中腹東側の高台に移された。その後この地で永く祀られていたが、明治二年成満寺に安置され、昭和五十一年の火災により焼失した。

### なこの坂

貝家町から加富神社へ続く曲がりくねった坂道である。その昔采女城落城の際泣きながら登って逃げのびた坂ともいわれ、また一説には城主采女正が一羽の大きな鳥を見つけこのところから矢を射れば「鳴おきな」といわれたとも伝えられている。土地の人が子供のころ聞いた話として、この坂から北山(采女城跡)に向けて矢を放つと、当たったら泣くだろうなということから「なこの坂」となったともいう。



### ごくろ(御苦労)

かつて貝家から采女城の西を通って室山に通じる山道を溝野道といった。溝野とは采女城跡の北にある小字名で、なかに御苦労(ごくろ)の地名がある。

その昔本丸の水が涸れると足見川に水汲みに昇り下りする人々がお互いにご苦労さんと呼び合ったところから「御苦労」という地名が生まれたともいわれる。足見川にかかる橋をごくろ橋といった。



いわき（岩木）

内部川と足見川の合流地点一帯の地名。イワキは亜炭の別名。亜炭は正式には褐色褐炭とよばれ炭化度の低い石炭。城山山麓にこの亜炭層があり、燃料が枯渇した場合唯一の地下資源であった。

## 加富神社

政務天皇の三十八年（168）創立と伝えられる。当時、火の宮と称し位置は明らかではない。天智天皇の時代（668～672）に今の地に移され、俗に火の宮ともいった。もと采女七郷の総社で三重郡六座の一つである。

後藤家の城主は安穩息災武運長久と諸人の快楽満足を祈願して社頭の造営を行っている。後藤方綱は天文五年（1536）、その長子藤勝（後藤采女正）が元亀元年（1570）に造営した棟札の写しが文献に残されている。



## 的場

的場とは的をかけ、弓・鉄砲などを練習する場所をいい、射場、弓場ともいう。

波木町加富神社のあるところは小字名を加登美（カトミ）といい、その中はさらに的場・タルの地名がある。この的場は采女城の弓の稽古場であったことからついたと伝えられている。

## 真慧上人御舊（旧）跡

真宗高田派の中興上人と仰がれている真慧上人は、野州の本寺（現在も栃木県芳賀郡二宮町高田にある）から、寺基を伊勢の国一身田に移されるまでの間、この地に七堂伽藍を建てて、北勢地方の民衆を教化された。しかし後藤采女正の妻女にまつわる事件により追われて鈴鹿郡に移った。また一説には後藤采女正の姫が真慧上人に帰依したことを怒ってこの地を追放したともいわれている。

この辺一帯を「中山」（なかやま）と言い、歯骨堂（しこと・納骨堂）、風呂屋の谷（浴場）、塔頭、坊舎、家中屋敷などが地名として残っている。南小松の中山寺はこの地名に由来する。跡地には石碑が建てられている。

## 成満寺

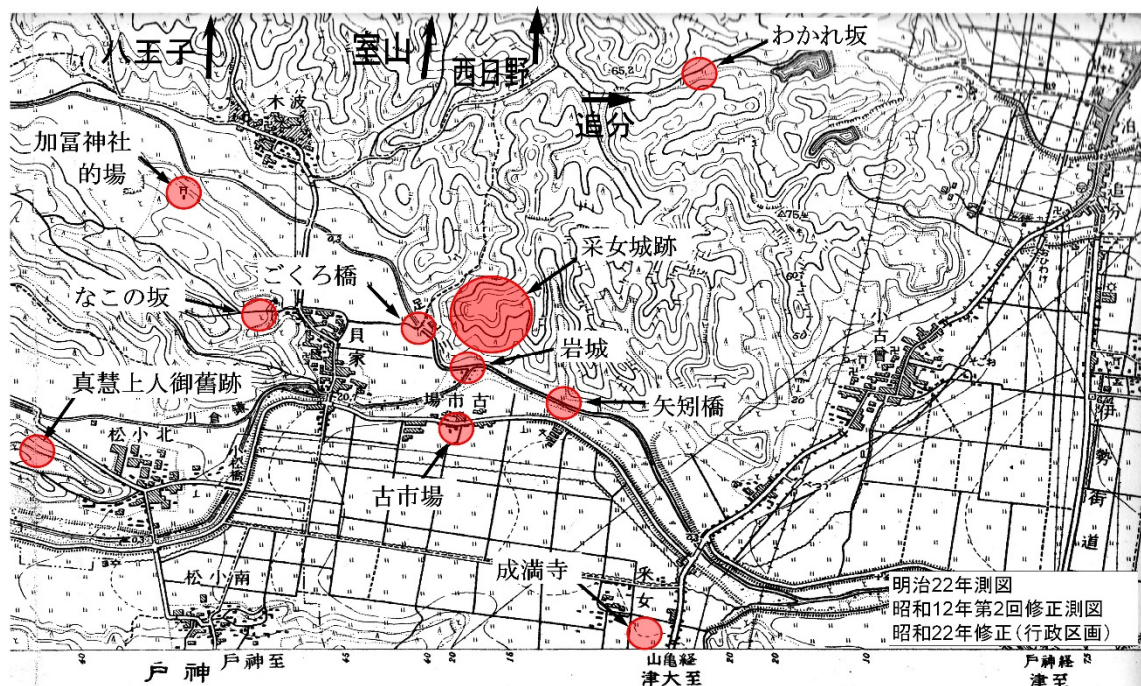
永承二年（1047）真言宗長生寺として創建されたと伝えられ、永正年間（1504～21）に後藤采女正藤勝が後藤家の菩提寺として自分の法名（采女公殿四品釋成満大居士）に因み米田山成満寺と改称し、専修寺第十世真慧上人の弟子専察を迎えて真宗高田派に転派して再建された。しかし采女城と共に織田信長の兵火にあい焼失、三代目の折に再建されたと伝えられている。



## わかれ坂

「日永郷土史」が伝える伝承の地名。

それによれば「信長の北勢侵攻は四度に及んだが三回目の永禄十一年（1568）十月には富田城（南部氏）、中野城（中野藤太郎）、采女城（後藤氏）、古里城（式井氏）をおそった。寄せ手の滝川一益は六千の兵をもって今の白髭神社のあたりにあった古里城（砦か）を攻めたが城主式井師貞は盟主後藤采女正を頼って一族を率いて逃げた。泊村の西奥（今の安政池あたり）を通り、途中からは馬を捨てて采女城に向かった。この愛馬との別れを惜しんだ場所を「わかれ坂」といったという。滝川一益はそのまま采女城に向かい、城を守るおよそ五百の兵は良く奮戦したが、城主采女正は火中で割腹して果てた。」とある。



采女城ゆかりの地名・史跡